

総合教育会議記録

1. 日 時 平成30年1月22日(月) 午後 4時15分 開会
午後 5時30分 閉会

2. 場 所 条里南庁舎 会議室

3. 出席者 横手市長 高橋 大
横手市教育委員会
教育長 伊藤 孝俊
教育長職務代理者 二階堂 衛
教育委員 加賀谷長吉
教育委員 今仲 和代
教育委員 佐々木雅子

4. 説明のため出席した者(10名)

総務部次長兼総務課長	栗田 律子
教育総務部長	見田 貞一郎
教育総務部次長兼教育総務課長	高橋 純
文化財保護課長	高橋 輝幸
図書館課長	内藤 郁子
教育指導部長	高橋 玲子
教育指導課長	江畑 譲
学校教育課長	木村 雅美
学校教育課政策監	遠藤 美紀子
学校給食課長	富山 直美

5. 事務局 総務課文書法規係長 佐藤 和志
教育総務課総務係長 大塚 昭生

6. 会議に付した事件

- (1) 平成30年度教育行政方針(案)について
- (2) その他

7. 会議の経過と結果

開 会 午後4時15分

●見田教育総務部長

ただ今から平成29年度第1回横手市総合教育会議を開会する。本日の進行は教育委員会教育総務部長が担当するのでよろしくお願いします。

まず会議の概要について説明する。横手市総合教育会議は平成27年4月1日に施行された地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部を改正する法律に基づいて、平成27年5月25日に設置したもので、会議は教育に関する予算編成、執行や条例の提案など重要な権限を有している地方公共団体の長である市長と教育委員会が十分な意思疎通を図り、地域の教育課題やあるべき姿を共有して、より一層民意を反映した教育行政の推進を図ることを目的としている。協議については自由な意見交換を行うことを想定している。本会議において、平成27年度には会議の設置に係る要綱、平成28年度は第2期横手市教育ビジョンをもって教育大綱に代えるという協議をしている。

はじめに高橋市長と伊藤教育長からご挨拶をいただく。

●高橋市長

教育委員会の委員各位及び職員の皆さまにおいては、教育行政全般にわたりご尽力いただいております。この場をお借りして心より感謝申し上げます。

社会そのもの、社会の基盤をつくり上げていくうえでは、教育は欠かせず教育が根源となって成り立っている。この社会を良くするも悪くするも教育次第だ。そのような意味ではこの横手が、秋田県が、そして日本が良い方向に向かっていくためには教育が大事になってくる。その担い手として舵取り役でもある皆さまの活動に重ねて敬意を表する。

横手市は、伊藤教育長を筆頭に全ての市民がしっかり育ちやすい環境づくりをしていかなければならない。予算や人は限られているが、その中で最大限の効果を出すことが求められている。知恵を絞りながら持てる能力を最大限に出し合い、いろいろな機関と協力しながら、良い教育行政の推進に努めていっていただきたい。皆さま方の力をもってすればそれは実現できると信じているし期待もしている。いずれにしても、市当局としっかりと連携を取り合いながら進めてまいりたいので引き続きご指導くださるようお願いする。

●伊藤教育長

いじめ等の不祥事が全国で相次いで教育委員会そのものの資質が問われる事件が多発した時代があり、教育委員会の改革が取沙汰されてこの新制度が出来た。教育委員会が独立した機関というだけで走るのではなく、市長部局との連携を深くする中で市全体で市民を育てているという視点がこれからの時代には必要なのではないかと思う。そのような面では、総合教育会議においては市長をはじめ総務部長、総務課長、まちづくり推進部の参加を得て課題を共有しながら、いい道筋を見付けられれば今会議の意義があると思う。本日は教育委員の皆さんのご出席もいただいて、日頃お考えのことを忌憚なく発言してもらい、より良い30年度にしていきたいのでご理解とご協力をお願いします。

(1) 平成30年度教育行政方針(案)について

〔説明〕

●高橋教育総務部次長兼教育総務課長

この資料は平成30年度に横手市教育委員会が取り組む事業についての展望をまとめ、政策会議を経て市議会3月定例会への提出を予定しているものだ。

【以下、[議題（1）資料]を基に説明】

●見田教育総務部長

平成30年度事業の重点となる部分について教育長から説明をいただく。

●伊藤教育長

横手市総合計画に基づいて立てた第2期教育ビジョンが総合教育会議で制定された教育大綱ということで共通理解を図ってまいりたいと思う。このビジョンに基づき平成30年度は特にどのあたりに力を入れていくのかについてまとめたのがこの教育行政方針になる。

子どもたちが将来横手市をしっかりと語れる、横手市を発信できる、そして社会人として自立して社会に貢献できるような大人にしたいというのが最大の狙いになる。そのためにどうすればよいのかという視点で常日頃考えている。障害のある子どもたちの存在がかつてと違って今は明確になってきており、障害を持った子どもたちが通常の子どもたちと社会の中で共生できることがこれからの社会の大きな命題であることをぜひご理解いただきたい。そのためにインクルーシブ教育という概念が教育の中に入り込んできた。共生社会を実現するために学校教育の中にも共生するという点についての配慮が必要だということが考え方の根本にある。昔のように特殊学級として囲い込んでやる教育だけではなく、広く通常学級の中でそういった子どもたちに配慮しながら社会生活を営む力が小さい頃から必要になるということ。平成17年の合併時にはインクルーシブ教育という言葉では表現されてはいなかったが、特別支援教育に関する指導主事を横手市では抱えていた。今後、特別支援教育に関しては市をあげて何らかの政策を実施していく必要があり、そのような社会になるだろうと予想して事業を展開していた。ここに至ってそういった機能が十分に発揮されるようになり、それに加えて学校に行けないような不登校気味の子どもや、弱い立場の子どもたちもなんとか通常の社会生活を営めるようにするための例えば南かがやき教室、西かがやき教室等の充実も図ってきたところだ。

言語活動の充実による学力向上推進事業に予算を付けてもらってから既に10年を超える。第1期は平成21年から始めている。県外から教育視察に訪れた方々は「初めて聞いた。」「そのようなことが出来るのか。」と驚き、大変評価の高い事業だ。これは横手市が独自に中学校校区を指定して2年間の研究を委託し、2年目に公開研究会を開くというものであり、1年目はないが2年目からは毎年公開研究会が開かれることになっている。しかも、各校が単独の研究テーマで研究を行うのではなく、市全体の共通テーマで研究を行う。言語活動をどのように充実させたらよいのかという視点での研究だ。これをやり始めたときは批判を受けてなかなか実施しにくい状況だったが、平成21年度からスタートして1期目が終わる頃には理解が進んでいた。国や県からの指定は受けない。なぜかと言えば、国や県の指定は2年限りで終わってしまい、指定校は研究するもののそれが市全体に広がることはなかったためだ。他の地域でも同じだった。こなすことに力を注いで、広げたり充実させることへのフットワークは鈍かった。市全体で共有することが必要だというのが当初の考え方だった。残念ながら1期目は成績に表れなかったが、公開をした学校は成果が見えるようになってきている。最大の理由は教員の理解にあるが、図書の利用とNIEの推進を全体でどの学校も等しく実

践しているという言語能力の育成が学力を支えているという考え方がどの学校にも浸透してきた成果なのでないかと考えている。これをもう少し今後も続けていって、世の中の流れや学校の変化について検証しながら、この事業の見直しを図っていきたいと思う。

これまで考えてきたのは小中学校の9年間をどうするのかについての10年間だった。最近の2年程前からは、ゼロから15歳までで考えられないか。保育園や幼稚園での育ちがすべて小学校に反映してきている。保育園や幼稚園での育ちの質を高めない限りは小学校に入学してからでは遅いという事象がたくさん見えてきている。これは親も含めての話だ。したがって、保育園や幼稚園と小学校の接続をいかにスムーズにさせるか、小学校から見た保育園、幼稚園の姿を明確にし、その逆も有り得るが、ゼロから15歳までの学びの質を市全体で上げていく努力を今後しなければならないということからスタートさせ来年で3年目になる。こども未来担当も頑張っていて、そこを横手市の大きな目玉に出来るのでないかと考えている。

十文字統合小学校の建設、増田中学校の改築は計画どおりに進めていきたい。今回はスポーツ振興課や生涯学習課も書いている。生涯スポーツについては学校教育に関係したものを載せた。共有しつつ、棲み分けもしつつ、お互いに補い合ってよいものにしたい。

増田図書館、平鹿図書館については市庁舎の中にあることが一つの特色だが、市内には公立図書館が複数あり、これからはどの図書館も同じ性質の同じ特色のものではなくて、場合によっては地域に合ったそれぞれが特色を持った図書館づくりに努めていきたいというのが夢だ。

文化財等々の大変期待できるものも含まれているので、平成30年度はそういったところにも目を向けながら広く横手市を発信できるように教育委員会としても頑張ってもらいたいと思う。

〔質疑〕

●高橋市長

減塩献立は保護者向けなのか。例えば授業参観のときに子どもと一緒に減塩献立を食べてもらうことはできないか。ごっつお給食を食べたときに普段私が塩分の多い食事をしていることに気付いた。減塩給食を子どもたちが食べて、家に帰って「お母さん、しょっぱいよ。」と言っても塩の加減は書面では伝えきれない。何グラム塩を入れてもいいという数字はあっても味覚ではわからない。来年度は無理だとしても保護者の皆さんに給食を食べてもらって味覚で感じてもらう機会をつくってはどうか。

●富山学校給食課長

調整が必要となるためすぐには出来ないが、学校の学年部の事業として希望があれば日程を調整して実際に体験していただいている学年もある。

●高橋市長

希望があるような家庭はそのような意識があることなので心配いらないと思う。代金は発生するが、むしろ意識がない家庭にわかってもらうために集まらなければならないときに食べてもらうことも考えられる。

肥満と運動不足について。自分の足で通学している子どもが激減しているように感じている。家庭の事情や学校が遠い、部活が遅くなって夜帰らせるわけにいかないなど理由があっ

てのことだと思う。車の後部座席でゲームをしながら登校している光景をよく見る。重役出勤だ。この子どもたちが社会に出て運転手付きで会社に行けるように申し上がるまでどれくらいかかるのか。そのような子は、おそらく玄関先から勤務先までドア・トゥ・ドアで送り迎えしてもらえる環境を経験する立場になるのは難しいのではないかと。至れり尽くせりの今の環境は人生の中で天井にあたる。人生の至れり尽くせりのピークが学生時代で、その後の社会では厳しい現実が待っている。それは可哀そうでもあり残酷なことだ。実際に歩いて帰ってれば肥満率も高くはないのではないかと思うが。

●伊藤教育長

肥満率は秋田県全体で見ても横手市で見ても高い。傾向としては郡部が高い。スクールバスとの肥満率とは関係がないとは言えない前提で考えなければ。極端な肥満率が出ている子どもと正常な子どもとの差が非常に大きい。健康推進課と学校教育課で連携し、特に問題がある子どもについては面談しながら対応している。全体としてそれを意識した学校の生活になっていると言えば、まだ弱いものがある。校長会や教頭会で話題にしながら頑張らなければいけないと感じている。

●高橋教育指導部長

横手の肥満率は秋田県内で高いほうにあるため教育委員会でも問題視している。健康推進課、医師会、幼稚園の関係の方々とその対策について話をする機会がある。小学校や中学校での肥満率が高いことのスタートがどこにあるのかと数値を分析したところ、小学校への入学時点で既に高いことがわかっている。小学校に入ってから対策を考えるだけでは不十分で、それ以前から家庭で関心を高めてもらう方策をこれから取っていく必要があることを関係機関と確認したところだ。どのような機会が考えられるのか具体的などはこれからの話になるが、保護者の皆さんへデータを提供しながら、このままでは子どもたちが将来健康な生活が実現できなくなる危険があることをお知らせしなければならないと考えている。

●高橋市長

キャリア教育でどのような教育をするのかわからないが、欧米ではエリートになればなるほど太っている人が少なくなっていく。要は自己管理できない人が組織を管理できるのかということ。ヒエラルキーの下の方の人は太っている人が多い。自己管理をしなくてもよい立場の人たちは太っている。高所得者や管理する立場の人で太っている人は少なくなってきた。キャリア教育は自分に厳しくできなければ成功できない。目の前に食べ物があれば欲望に負けて食べてしまうが、自分を制するのか、それともそれ以上に運動して消費するのかは環境を与える親にも関係してくるのでないか。親の教育が一番難しい。そこにどうアプローチしていけばよいのか私も答えを見付けられないでいるのだが。

●高橋教育指導部長

子どもたち自身の意識を高めていくことがどんどん出来ていけばそれにこしたことはないが、まだ小さいうちの家庭での環境が非常に大きいので、学校で定期的に肥満の状況を把握して気になる子どもについては健康推進課の栄養士の力を借りて、個別に栄養指導をしてきめ細かに対応している。必ずしもすぐに成果が表われるようなものではないが、例えば日常から体重測定をしたほうがよいというアドバイスを受けてから自分の食生活を気にするようになったという子どももいる。特効薬的な取組みはなかなかないが、きめ細かな対応を続け

ていくことがご家族の意識を変えていくことに繋がっていくのでないかと考えている。

●高橋市長

小さい内から癖になる味を世の中がマーケティングの中に組み込んでいる。採算が合うかどうかは別にして子ども向けにおまけを付けているファーストフード店がある。子どものうちから食べさせることでそれがやがてお袋の味となり未来永劫それを欲するような大人になる。生きているうちはそれを食べたくるので、その企業にしてみればその食育は成功していることになる。大人の社会が子どもたちにその味を植え付ける戦略に乗せられている。肥満になりやすい食べ物は確かに美味しいし、企業も促すような戦略をとっている。各家庭の事情はあると思うが、子どもにはなるべく家庭の味を欲するような大人に育ててほしいと思っている。

●二階堂教育委員

I C T環境の整備について、無線L A N環境整備後はタブレット等I C T機器を計画的に導入するとあるが、具体的にどのような計画を考えているのか。

●高橋教育総務部次長兼教育総務課長

無線L A Nの環境を学校に整備すれば当然電波が飛ぶ。タブレットを段階的に導入することで子どもたちが日常的にタブレットを使いI C T環境に慣れてもらうのが目標だ。一度に導入できればよいのだがそれは難しい。当初は各校のパソコン教室にあるパソコンの教程度を導入したい。据え置きのパソコンとは使用目的が違うので同じような数のタブレットを導入していきたいと考えている。具体的には平成31年度くらいから導入を始め、最終的には1校に50台程度。31年度に中学校には120台程度を入れることができればいい。32年度には小学校に280台程度。33年度には小中学校に残りを入れるという展望を抱いている。予算の関係もあるのでこの通りは行かないかもしれないが段階的にはそのようにしたいと考えている。

●二階堂教育長職務代理

この学校にはあるがこの学校にはないというケースが出てくると思われる。整合性と言うか不平等さの解消についてはどう考えているのか。

●高橋教育総務部次長兼教育総務課長

タブレットなしの学校がないように薄く配置を進めていく。実験的に導入していった3年目あたりには必要な数を充足させていき、この学校にはあるがこっちは学校にはないというような状況は避けていく。

●二階堂教育長職務代理

確かにこれからの時代はそのように進んでいくと思うが、それが最優先であってはいけなと心配している。タブレットを持ってしまえばそれに頼ってしまう。英語ですら辞典を開かなくなってきているような時代だ。子どもたちが本に折角慣れ親しんだのに辞典を引くことができないなどということがないように願いたい。

●佐々木教育委員

不登校適応対策といじめの根絶について。南かがやき教室と西かがやき教室で行っていて、悩みを抱える子どもたちや保護者、悩みを抱える教職員に対する相談活動もきめ細かく充実させていくということだが、かがやき教室と学校との連携はどのようになっているのか。

就学前教育・保育と学校教育の連携・接続について。双方で子どもたちの育ちや学びの相互理解のための取組み、学びの連続に向けた交流活動等とある。これを読んだときに、昨年度はこの方針が教育委員会側からと学校側からの取組みになっていたが、同じような内容でも子どもたちの目線に立った文言となっている。学校訪問を行ったが、ひとつ階段を上った次の段階に来ていることが感じられ嬉しく思った。

●江畑教育指導課長

不登校適応指導については、南かがやき、西かがやきとそれぞれの学校はしっかり連携を図っている。悩みを抱える子どもたち、保護者、そしてその子どもたちを担当する教職員も同じ悩みを抱えているので、その教職員に対する相談活動等も行っている。学校に来ることができない場合であっても勉強していかなければならないので、学校で行っているプリント等を教室に持って行って児童・生徒に学ばせている。学校との連携が非常に密になっているので、それぞれの教室に現在入級している児童・生徒の中でも多くの児童・生徒が学校へ通えるようになっている。

●二階堂教育長職務代理

文言について。例えば、「学習教材として活用していただく」「横手市産食材に親しんでいただく」とあるが、小中学生に対する言葉であれば「いただく」という言葉はいかがなものかと思う。教育行政方針としては「活用してもらおう」「親しんでもらおう」のほうが適切なのではないかと考えるが。

●高橋教育総務部次長兼教育総務課長

執筆した者の思いとしては丁寧にという意識があって書いたものだと思うが、ご指摘のとおりだと思うので表現を検討していく。

●見田教育総務部長

指摘内容は教育行政方針全般について確認していく。

●高橋市長

「いただく」とあるのは多分そのような気持ちで向かっていっているから出ている言葉だと思う。いじめの撲滅にも繋がっていくからそうしているのかもしれないが、今は先生と生徒が友だち感覚にあるように見える。生徒も先生に慣れ親しんでおり、ある意味においてはよいのかもしれない。私が中学生のときは、先輩に対しては先輩として接したし、先生に対しても何の疑いもなく当たり前のように目上として接していた。今は先生にフレンドリー過ぎるところも見え、いかがなものかと思う。フレンドリーだからこそ友だち感覚で自分の気持ちを開いてすべてを先生に伝えることが出来る利点もあって、そう接しているのか。社会に出れば必ず下からのスタートになる。学校時代をそのように過ごしながら育ってしまっただけから上下関係がある社会いきなり出るというのも酷な話だと思う。今のトレンドがそうなのかもしれないが、いい部分もあれば悪い部分もあるのでないか。

●伊藤教育長

小学校ではまだ発達段階にあるということもあり上下関係は発生しないが、中学校の部活動では上下関係がそれなりにある。心配するレベルまでは行っていない気がする。国や県教育委員会から言われており、学校では子どもたちに「さん」を付けて呼んでいる。個人的には違和感があるし、おかしいのではないかと言う保護者の方も実際にはいる。形式的なところ

を問われる部分が多い。形式的な部分だけが拡大して大きく広がってスマホ等にあげられるような時代なので教育現場ではナーバスになっており、そのようなネガティブな部分が現在の教員にはある。

●見田教育総務部長

平成30年度教育行政方針（案）についてご異議ないか。

【「異議なし」と呼ぶ者あり】

細部については再度チェックをすることとし、これを議会に提出させていただく。

その他として自由討議も予定していたが既に予定時間は経過している。もしこの場で何かあれば発言をお願いします。

【「なし」と呼ぶ者あり】

本日は貴重なご意見を出していただき御礼申し上げます。他にご意見がないようなので、これで平成29年度第1回横手市総合教育会議を閉会する。

閉 会 午後5時30分